

チャペル ブックレット No.18

人間関係を生きる知恵

島 しづ子



チャペル ブックレット No.18

人間関係を生きる知恵

島 しづ子



名古屋学院大学 宗教部

人間関係を生きる知恵

島 しづ子



しま
島 しづ子

日本基督教団 名古屋堀川伝道所牧師
NPO法人 愛実の会（障がい者通所施設）理事長

NPO愛実（あみ）の会は名古屋市港区内にあり、重度の障がいをもった方があたり前に地域社会で生活できるような社会を目指し、その生活を支援しています。

皆さんに質問をしたいと思います。質問は「皆さんご自分のことをお好きですか？」ということです。それから「今の日々に満足していらっしゃいますか？今の生活が好きですか？」ということです。私は何年前に皆さんよりも少し若い高校生の人に「先生は自分のことが好きですか？」って質問されました。「好きですよ」って答えましたが、その後その方がどうしてそんな質問をしたのかなって考えた時に、その方はきっと自分のことが好きじゃないんだなと考えたわけです。じゃあ私はどうして自分のことが好きなんだろうかなって考えたときに、自分が大事にされたから、あるいはあなたは必要な人間だよというようなことを体験したからかなと思うようになりました。

皆さんの中でも聞いた人がいると思いますけれど、今から五十年前にジャン・バニエという人がラルシュ・ホームというものを始めました。ジャン・バニエは第二次世界大戦の時に軍人でした。戦争を垣間見て、「どうして人間が人間に対してこんな酷いことができるんだろう」と考え、軍人を辞めて、哲学を学んで哲学博士になりました。カナダの大学で哲学を教えていた時に、フランスのトマという神父が「私の友達に会わないか」と勧めました。ジャン・バニエはトマ神父の勧めに従ってフランスのトロローリー村というところを訪ねて行きます。そこで出会ったのが精神病院に閉じ込められていた知的障がい者たちでした。障がいを持った人たちがなぜ病院で暮らさなきゃいけないんだろうかということがジャン・バニエには不思議でした。50年前のフランスでも障がい者の置かれた環境は決して良くなかったようです。ですから彼はいろんな施設をまわって障がいを持った人がどういう生活をしているのかと見てまわりました。ある時、精神病院でお昼を食べた後で皆さんが散歩していたそうです。病院の中庭で列を組んで入所している人たちが散歩していたそうです。でも中庭だけなんです。気分転換ということで反対回りになります、それだけの散歩です。他の施設に行った時はたぶんこの教室ぐらいの大きな病室にたくさんのベッドが並んでいたらしいんです。それでベッドの上には一人一人の方が横たわっていて、バニエさんがそのベッドの上の方を見た時に、その人は体を緊張させていて無表情だったものですから、「ああこの方は何にもわからないんだな」って思ったそうです。でもその方に話しかけた時にその方は体の緊張を解いてバニエさんの声に耳を傾けたんですね。ああ、この方は何にもわからないんじゃないなくて、ずっと誰かが自分のところに来て声をかけてくれるのを待っていたんだということが彼はわかったんですね。

バニエさんはそのようにして自分が語りかけるのを待っている方がこの部屋に

大勢いるってことに愕然としたわけですね。それから彼は夜眠れなくなりました。どうしてかという、昼間施設や病院で会った人たちが、「あなたは私をここから出してくれるのか」って言うような気がしてしまっただけです。それで彼はトロリー村の精神病院から3人の障がいを持った人を連れ出しました。フィリップとダニエルとラファエルという三人です。ダニエルは連れ出したその日のうちにその生活が馴染めなくて病院に戻ってしまったようですが、ラファエルとフィリップはジャン・バニエと一緒にトロリー村の一軒の家を借りて住み始めました。ジャン・バニエはカナダ提督の息子で、哲学の勉強をした軍人ですから家庭的なお料理なんかは全くできないです。それでもラファエルとフィリップはとても落ち着いてジャン・バニエとの生活を始めました。その生活のことを後から聞かれたとき彼らはこう言ったそうです。「ジャン・バニエと暮らし始めた時にトイレが家の中になかったから庭の外に出て行かなきゃいけなかった。時々水は止まっちゃった。もうジャンの作るようなものは本当に不味くて食べられたもんじゃなかった。でも僕たちはやったって気持ちだった」。病院を抜け出ることができたということですね。

そんなことがあって精神病院の院長さんは「もうあなたにこの病院を任せるからラルシュ・ホームにしてください」とジャン・バニエに言いました。そんなふうにしてラルシュ・ホームはどんどん増えていきました。成功したかという、とても難しかったでようです。ラルシュ・ホームは今でも世界130箇所以上あると思います。障がいを持った人と、アシスタントと呼ばれる人が家族のように一緒に過ごす家です。でも病院や道端から来た障がいを持った人たちはとても問題を持っていました。どういう問題かという、暴力的だったということです。テーブルをひっくり返してしまったり、仲間のことを殴ってしまったり、あるいはアシスタントのことを殴ってしまったりします。でもそういうことがあるからこそ病院に入れられ、家に居られなかったわけですから、ラルシュの人たちはその人たちを追い出すことは出来なかったんです。それで考えました。特にジャン・バニエはこういうことを発見しました。これは彼らの叫びだ。彼らは叫んでいる。障がいを持って生まれたために「あなたなんかいないほうが良かった」「あなたのためにこんな苦勞をする」そんな言葉の暴力、あるいは時々には体に暴力を加えられても彼らは我慢してきた。でももう我慢できなくなって叫んでいる。それは「私だって人間だ、馬鹿にするな」という叫びです。ラルシュでは長い間そういう暴力を受けて暮らしてきた人たちが落ち着いて生活ができるようになるまでずいぶん時間がかかったようです。でも自分が落ち着いて迎えられるということを知った方、たぶん40代でラルシュホームに来て30年経った70代のお誕生日の時にある人がこう言ったそうです。その人は気に入らないいつもテーブルをひっくり返していた人でしたが、70歳になって落ち着いて、若いアシスタントは彼がかつて暴力的だったってことは知らないです。その彼が誕生日の時にこう言ったそうです。「ここはいい所だ。鞭もないし体を叩かれることもない」30年にわたって彼はそのことを黙って我慢しながら、でもここは安全なところだっ

ことを言ったんですね。彼が暴力的になるのは当然でした。体に鞭打たれ、いわれなき暴力を振るわれてきた、そういう歴史を彼が担ってきたってことです。

実は私がこのジャン・バニエに出会い、そしてラルシュ・ホームをつくりたいなって考えるようになったのは、私の個人的な経験からでした。私の子どもは3人おりますが3番目の子どもは陽子という女の子でした。1歳3ヶ月のときに百日咳という病気になり、それが悪化しまして、百日咳脳症、そして百日咳の無呼吸発作になりました。ある晩、娘がひきつけを起こしまして、私は病院に行きました。発作はすぐに収まり、お医者さんは「どこも悪いとこないね」と私たちを帰そうとしました。でもお医者さんが席を外した時に彼女は私の腕の中で呼吸を止めてしまいました。無呼吸発作だったんです。お医者さんをすぐに呼び戻しました。お医者さんは優秀だったので、人工呼吸器を取り付けてくれました。でもずいぶん昔のことですから、そんな小さな子どもにつける人工呼吸器はなかったんです。お医者さんたちは努力して学童期の子どもさんに付ける呼吸器を娘の口にセットしてくれました。朝、ようやく落ち着いた時にお医者さんが言いました。

「お母さん、あきらめてください。娘さんは助かる可能性はありません」

私もそう思いました。でも「先生助けてください」とお願いしました。毎日が危篤のような状態でしたが、一週間経ってお医者さんが私を呼びましてこういうふうになりました。「お母さん娘さんの脳波は平坦です。人間の脳は働いていると波がありますが、お嬢さんの脳波はほとんどフラットですから回復の見込みはないんです」それは治療をしていても意味がないから呼吸器を外しようという相談だったんですね。私はそれを受け入れることができませんでしたから、「先生呼吸器を絶対外さないでください。治療を続けてください」って頼みました。でもベッドに触れている部分は腐って、床ずれになっていきますし、点滴を入れているんですが、その場所も腐っていきました。点滴を確保するために、なかなか血管が出てこないの血管にメスを入れて針を刺すってことをしました。ですからこんな治療を続けてもいいんだらうかって私も思いました。でも幸いなことに30日を過ぎたころに彼女は目を開けました。実はお医者さんは呼吸器を外しようという提案の時に私が事態をちゃんとわかっていないと思ったのか、「お母さん、娘さんは99%助かりません。助かったとしてもこうやって人工呼吸器をつけて全身管だらけで重い障がいが残るんですよ」って言いました。でも私は治療を続けてもらいました。30日を過ぎたころ目を開け、「ああ意識があって良かったな」と思いましたが、「陽子ちゃん良かったね」と言っても、自分が何者で、私が母親ということは理解できてはいませんでした。そしてせっかく開けた目も黒目がまぶたの中に入ってしまっていて見えてないことがわかりました。いわゆる植物状態患者として彼女は目を開けて、お医者さんの言ったとおりの重い障がいを持ったわけです。

お医者さんも目を開けたってことが嬉しかったものですから、「この子は不思議な子どもですね。普通状態が悪くなって、落ち着くと前の状態よりも悪くなるものですが、お嬢さんの場合は落ち着くと前より良くなっていますから、何か試し

てみましょう」というふうに言いました。「どうするんですか」と聞いたら、「呼吸器を外しましょう」と言いました。「えー先生、呼吸器で生きているんですから、呼吸器外したら死にますよ」とすると先生は「いやお母さん人間は楽をすればそれっきりだけれども、お嬢さんが自分で呼吸できるようになれば、色々な可能性も出てくるから、試してみましょう」と言いました。「そんなもんかなあ」と思いました。そしてその日がやってきました。個室に寝ている娘のベッドを若いお医者さんたちが囲み、呼吸器が外されました。私はすぐに駄目になると思いましたが、娘は呼吸を自分で始めました。とても苦しい息で病棟中響くような息でした。私は耳を塞ぎたかったです。でも5分ぐらい彼女は自分で呼吸をして心臓が止まりました。お医者さんたちは心臓が止まることをちゃんと考えていたようで、すぐに心臓マッサージをして心臓を動かし、また呼吸器をつけました。「よく頑張ったね。5分頑張ったから今度は10分頑張ろうね」というふうにして、体調のいい時を見計らいながら自分で呼吸する時間を延ばして行って、24時間自分の力で呼吸ができるようになりました。いろいろありましたが、10ヶ月経った時にお医者さんが私に言いました。「お母さん、家に帰りたいでしょう」「帰れるんですか?」と聞きました。その時に思い返してわかったのは彼女は10ヶ月間点滴だけで生きていました。お医者さんが言うには「栄養剤を口から飲めるようになれば帰れるよ」とってことでしたので、100CCぐらいの水に溶かした栄養剤を一匙一匙口から飲ませました。1時間もかかりました。飲み終わって「ああ良かったな」と思ったらもどしてしまいました。なんとか落ち着くようになったので家に帰ることになりました。でもどうやって育てていいのかわからないんです。その時にある先生が私にいいアドバイスをくださいました。その先生はお茶の水女子大学で障がい児教育をしてこられた方です。当時私立の養護学校を運営していました。先生は私にこう言ったんです。「鳥さん娘さんのできないことを数えるんじゃないくて、できることを数えてあげてくださいね」。目は、黒目の中心に目がくるようになっていましたが相変わらず私たちとのコミュニケーションはとれないし、もちろん立ち上がることもできません。でも先生がせっかく言うてくださったので、私も数えてみました。あったんです。呼吸ができるようになった。痛みを感じないから点滴の確保の時には血管に直接メスを入れていたのに痛みを感じるようになった。おしっこは管で出していたのに、おしっこを溜めて出すという訓練をして自力で出せるようになった。うんちもかきだしてあげていたのに、自分で出せるようになった。そんなふうにして5本の指が折れた時に嬉しくなりました。私も皆さんも娘に比べたら全部の指を足しても数え切れないくさんのことができます。じゃあ少なくともできない娘は生きる価値がなくて、たくさんできる人間は生きる価値があるっていうんだらうかって考えました。そうじゃないと思いました。私たちがなにかできるっていうのは何も立派なことじゃなくて、神様が貸し与えてくださったことです。そして私たちも命を持っていて、娘も命を持っている。これが嬉しかったです。家に帰って二人のお兄ちゃんと一緒に「陽子ちゃんが家に帰ってきて嬉しいね」とって暮らしました。一年ほど経った時に息

子の一人がこう言ったんです。「ママ、陽子ちゃん良かったね」「何が?」って聞いたら「陽子ちゃん笑うようになった」と言いました。植物状態患者のほとんどの人は表情がありません。でも彼女はお兄ちゃんたちの声を聞いたり、私が音楽のテープを聞かせたり、私が読み聞かせをする、それから口から少しずつ食べ物をとる、そういう中で笑顔を取り戻していきました。どうしたら笑顔が出るんだろうと思って、喜ばせたくっていろんなことをしました。テープでもこんなに喜ぶんだから本物のコンサートに行けばもっと喜ぶんじゃないかと思って、コンサートにも行きました。目が見えないって言われているけど美術館にも行きました。でも出かけるにつれて嫌なことにもたくさん遭いました。コンサートに行くと、彼女は素敵だなんて思うと「あー」って声を出してしまうんです。「あんな子何もわけがわからないのにあんなところに来て意味があるのか」とって見られました。デパートの美術展に行った時には、「車椅子から降りて抱っこして入るように」とって言われました。「いや、これはこの子の足ですから、このまま入らせてください」とってねばったら、「わかりました。お客さんが大勢ですから早く見て帰ってくださいね」とって言われました。病院では今の私ぐらいのおばさんが、「あんたもう前世で悪いことをしたんだらうから、この子にいいことをしたら、来世では報われるよ」とって説教してくれました。嬉しくなかったですね。でも私は娘の訓練を一生懸命して、仕事も一生懸命して9年ほど頑張りました。小学校2年生に娘がなった時に疲れ果ててしまって、というのは3人の子どもがいますけれども、3番目の娘が生まれる前に私の夫は亡くなっておりましてので、一人で子どもたちを育てながら、娘の訓練をし、また他にもボランティア活動をしていましたから疲れ果ててしまったんです。

それは1987年のことでした。その年にさっきお話したジャン・バニエが日本でもラルシュ・ホームをつくりたいという人たちによって日本に呼ばれて、各地で講演会を開きました。私は勧めてくれる人があって娘と一緒に神戸で開かれた、リトリートという集会、カトリックですとリトリートか黙想と言いますが、その会に私は娘と参加しました。ほとんどの人がカトリックやプロテスタントの宗教者、あるいは福祉をしている人、あるいは私のような障がい児をもった家族でした。私が持っていた思いは、「あなたたちいくら障がい者のことを知っているとしても、私の子どものように障がいの重い子は見たこともないでしょう」とってそんないじけたような気持ちだったんです。会の休憩時間にジャン・バニエが私たち親子のところにやって来ました。「名前はなんていうの?」って娘に聞きました。娘は答えられませんから、私が代わって「陽子です」と言いました。「陽子」とって首を傾げるので、「サンチャイルド、太陽の子どもってという意味です」とって説明しました。でも300人以上の人が出席していましたから、覚えてくれていないだらうなと思ったんです。でもその2泊3日のリトリートの最後のお話の時、私と娘は後ろの方に座っていました。彼はこういうふうに話しました。「皆さん私と一緒に2泊3日の旅をしてくださってありがとう。特に陽子ありがとう」とって言いました。覚えていてくれたんです。そして不思議なことを言いました。「陽子あ

りがとうみんなのしるしになってくれましたね」私はその言葉の意味がずっとわかりませんでした。そのリトリートが終わる最後の最後の時に主催者が私たち親子のところに来て、「陽子さんに仕事をしてもらいたい」と言いました。娘は訓練のおかげか、精神的なものはとっても豊かになりましたが、自分で話すとか自分で立ち上がって歩くとか、トイレに行くとか、自分でご飯食べるとか、そういうことができません。働くってできないんです。「どんなことですか」って聞いたら、「集まったみんなを代表してバニエさんにプレゼントを渡して欲しい」って頼まれました。「ああ、それならできます」そしてその時間になりました。参加者が輪になってゲームをして歌を歌い、プレゼントの時間になりました。預かったのは小さなトランジスタラジオでした。娘の膝に置いて車椅子を押して輪の真ん中に出て行きました。ジャン・バニエも輪の真ん中に来ました。彼は2メートル近い大きな男性です。自分でプレゼントを取り、もう一つの空いた手で娘の手を握りました。そしてニコニコと娘に笑いかけました。握手されて笑いかけられて、娘もまたニコニコって笑いました。二人は無言で握手していましたが、私はジャン・バニエさんの大きな体から声を聞いたんです。その声はこういうふうに言っていました。「陽子さん一生懸命生きてきましたね。私はあなたのこと尊敬してますよ。神様もあなたのこと大事に思っていますからね」。あなたを尊敬している。この言葉を聞いた時に、私自身が小さい時から求めていたものがそれだったって気が付きました。尊敬されたかった。尊敬されるためには一生懸命勉強をし、いい仕事をし、家庭を持ったら立派な家庭を築き、子どもたちを立派に育てる。そんなふうに思い込んでいました。でも夫が早く亡くなり、せっかく助かった娘は重い障がいを持ち、その娘と一緒に町を歩くということは決して気持ちのいいことではありませんでした。でもバニエさんが私たち親子を尊敬しているって言ってくれた時に、「ああ、もう登らなくていいんだ」って思いました。登ろうとすれば、娘や娘の友達を踏み台にしていかなきゃいけない、置き去りにしていかなきゃいけない。そんな生き方はしたくない。私たちを理解してくれる人がいる。もう全世界の人が馬鹿にしたってもう平気だってそんな気持ちでした。それからは生きるのがとても楽になりました。娘の障がいが軽くなったとか、私たちの生活が楽になったとか、そんなことじゃないんです。私たちを理解してくれている人がいるってことが私たちの生き方を楽にしてくれました。

それから5年後にジャン・バニエはもう一度日本に来ました。愛知県的美浜でリトリートが開かれました。その時娘は小学校の6年生でした。それまで家で生活していたんですが、とうとう食べ物が通らなくなって、十二指腸までチューブをつけて栄養剤を流し込んで栄養をとっていました。ですから病院に入院していました。私は多少の責任があったので、美浜まで毎日病院から通い、娘には「あなたの好きなバニエさんと澤田神父に会ってくるからそれまで死ぬんじゃないよ」こう言って出かけました。美浜で二人に会った時「陽子は元気か」って聞いてくれました。「いや元気じゃないです。もう再起できないと思います」って言ったら、二人は「このリトリートが終わったら南山大学に行くから、その途中で陽子さん

の病院に寄りましょう」って言ってくれました。嬉しかったです。私は調子に乗りまして、ある病院の小児科病棟に子どもたちがたくさん入院しているから、「子どもたちにも話をしてくれませんか」って頼んだんです。「いいよ」って言ってくれました。また私は調子に乗って、病院では看護師さんたちがいつもイライラして子どもたちに優しくしないもんですから「バニエさん、看護師さんに優しくするように言ってくれる」って言ったら、「いいよ」って言ってくれました。

その日がやってきて個室で横になっていた娘のところに二人は真っ先に行ってくれましたが、彼女は調子が悪くて目をあけませんでした。しかたがないのでプレイルームというところに彼女を車椅子に横たえて連れて行くと、子どもたちが並んでいて、後ろにはドクターと看護師さんがいました。バニエさんはこういう話をしたんです。「ねえみんな、自分が素晴らしいってこと知ってる？」子どもたちは首を振りました。「そうか、君たちは素晴らしいのに誰もそのことを伝えてくれなかったの。残念だな」と言いました。続けて変なことを言うんです。「ねえ、後ろにいる看護師さんたちのこと好き？」。みんな横に首を振りました。「お家の人のことは好き？」でみんなウンというようにコクンコクンしました。「そうかお家の人は君たちのこと大事にしてくれるから嬉しいんだね。大事にされると嬉しいよね」。でまた変なこと言うんです。「後ろにいる看護師さんたちも君たちから大事に思われたいんだよ」。私は「バニエさん反対、反対」って言いたかったんですが、バニエさんは「後ろにいる看護師さんも君たちから大事に思われたいんだよ。君たちが素晴らしいのはね、目の前にいる人を大事に思うことができる。大事に思えばね、目も手もね、あなたは大事な人ですってお話するよ」って言いました。私は5年前に確かにバニエさんからその言葉を聞いたなって思いました。そして娘もまたニコニコと目を開いて笑い始めたんです。食べる楽しみもなく病院でただ寝ている自分、でも自分のところに来る人を心の中で「あなたに会えて嬉しい、大事な人ですよ」って思えば自分の不自由な目も不自由な手もお話するっていうことを彼女は発見したと思います。そしてバニエさんは看護師さんたちに「子どもたちに優しくしなさい」って言う代わりに看護師さんたちが必要としているもの、その大変な仕事をしてくれている看護師さんに入院している人たちや同僚たちが「ありがとう。あなたのお陰で助かる。ありがとう私たちのために働いてくれて、看護師さん大好き」そういう言葉が本当は必要だってことをバニエさんは知っていたんだと思います。

娘は奇跡的に退院してそれから2年ほど家で暮らしました。彼女がした仕事はベッドに横たわっているだけでしたが、私が帰ったら喜び、家族のことを喜び、私の友人たちが遊びに来ると喜ぶという、人を歓迎するという仕事をしてくれました。1995年の1月に彼女はインフルエンザで亡くなりました。お葬式に大勢の人が集まってくれて、私はこういう話をしました。「神様に感謝しています」って言ったんです。子どもが亡くなって神様に感謝するって変な話です。でも最初の入院の時に99%助からないって言われた時、私はこういうお祈りをしました。「神様、この子が体の温かいうちに一度でいいから抱かせてください」呼吸器や管

をいっぱいつけて、身動きさせられませんでしたから、目の前にいても抱けなかったんです。一度でいいからと祈りました。でもそれから15年間、彼女は毎日何度も私に抱かれてくれました。そして人から人に贈る最大のプレゼントは何かっていうことを、バニエさんを通して私たちに教えてくれました。

娘が亡くなった後、娘の友人たちのために愛実の会をつくり、そしていずれはラルシュ・ホームをつくりたいと思ってジャン・バニエさんにフランスまで会いに行きました。その時ギャリという人に出会いました。ギャリはカナダ人ですけれどもバニエさんと一緒に30年以上にわたってラルシュ・ホームをやり、つくりあげてきた人でした。彼はこういうふうに私にアドバイスしてくれたんです。「島さん、名古屋では価値観の違う人と一緒に仕事をしてください」って言われました。変なこと言うなと思いました。私がポカーンとしていると、彼はこう続けました。「なぜならば私たちは生涯の終わりまで成長しなくてはなりませんからね」と言いました。一年経ってそのことを考え続けて私は理解しました。私たちの人生に、この人さえいなければ、あの人と出会わなければ、あんなことさえなければ、そういうことが必ずあります。でも嫌な人と、好きになれない人と、価値観の違う人と、どうやって一日一緒に過ごそうか、どうやって仕事をしようか、そんなふうに過ごす時に自分のやり方だけじゃなくって、その人のやり方だけじゃなくって、第三のやり方もあるって、そんな経験を私は積み重ねてきましたし、多くの人もそうだったんです。だから価値観の違う人がいるからこそ、自分の人生が深みを増したり、広がりをもったり高みを持つということを感じました。それで一年後にギャリさんにまた会った時に、「ギャリさんあのアドバイスは素晴らしかった」って言いました。その時、初めてフランスに行った精神科医の女性と一緒にでした。彼女は事情がわからなかったの、「どういう意味それ？」って聞いたんです。ギャリは面白い人なもんですから、「あなたの大嫌いな人と仕事をしなさいってことですよ」って説明してくれました。そんな出会いがあって、愛実の会やラルシュ・ホームの雛形のようなみどりの家で障害を持った人と暮らしてきました。ですがラルシュ・ホームの多くがそうであるように、決して楽ではありませんでした。

ジャン・バニエが障がいを持った人たちについて特徴的なことを言っている二つのことを紹介したいと思います。一つは障がいを持っている人たちは私たちの助けを必要とするだけじゃなくって、私たちを助けてくれる人たちだということ。それを私は娘を通して、あるいは娘の友人たちを通して本当にたくさんを学ばされましたから、助けてくれた、助けてくれる人だってわかります。もう一つ彼は言うんです。この人たちに耳を傾けたら世界は平和になるということです。世界中が平和になること、どんなに私たちは求めているのでしょうか。でもその基が、誰も耳を傾けない障がいを持った人たちの声と言うのです。でもそれで世界が平和になるって私には理解できませんでした。だけどバニエさんが言うんだから、それをちょっと考えていこうと思って、ずっとやってきました。

私たちのみどりの家で、障がいを持ったKさんと、30代の女性アシスタントと、

30代の男性アシスタントと18歳のアルバイトにきた女性で住んでいた時期がありました。私たちの家には一つのルールがありました。一ヶ月に一度分かち合いの時間をするというルールです。その時はなんでも言ってもいい、でもそれは議論する場所じゃないから、そんなのおかしいとか、そういうことは言わないという約束でした。ある時、18歳のそのアルバイトの女性が「この前Kさんがワーワーとうるさくした時に、アシスタントの一人が暗い玄関の外にKさんを出しました。私的に考えたらそれは良くないことだと思います」と言ったんです。Kさんはお話ができないんですけど、自分の要求を通す時には叫ぶんです。それはもう本当に聞いているのが辛くなるような声で叫ぶんです。私たちみどりの家ではKさんが叫びだしたら一人でお部屋に居てもらおうか、食事中だったらアシスタントと一緒に自分の部屋でご飯を食べてもらうというルールが決まっていたんです。でも暗い玄関の外に出すっていうのはルール違反なんです。私はその話を聞いてもう煮えくり返るような思いで、「それをしたのは誰ですか！」と問い詰めたかったです。でも議論したり説教する場所じゃありませんから、自分の番が来た時に心を落ち着けてこういうふうに言いました。「Kさんが叫びだすとつらいですよ。だからKさんを外に出したアシスタントはつらかったんでしょね。でも外に出されたKさんもつらかったでしょうね」そしてなんかひらめいてこういうふうに私は付け加えたんです。「ひょっとしたらそれをしたアシスタントの人は、小さい時にお家の人にそういうことされたのかもしれないわね」って言いました。それだけです。すると私の後のアシスタントが言いました。「それをしたのは私です。Kさんごめんなさい。今の今まで島さんが言われたことを聞くまで忘れていたけれど、自分は小さい時に悪いことをして家の中に入れてもらえなかった。すごく嫌だった。いつの間にかKさんに復讐したんですね」って言いました。次のアシスタントも「それをしたのは私です。悪いことをして押入れに閉じ込められて、どんなに頼んでも出してもらえなかった。あんなに嫌だったことを同じようにKさんにしてしまったんです」そしてその方は謝らなかつたものですから、Kさんが謝れて「ワワワ」と言ったので、Kさんに謝ってくれました。この話を私は私たちの社会の縮図のように思えましたから、アシスタントの許可を得ていろいろなお話させてもらっています。私と暮らしてきたアシスタントは私よりも優しい人たちです。でも人間関係が込み入って人は切羽詰った時に込み上げてくる怒りをどうすることもできません。そしてその怒りはどこから来るかっていうと私たちが小さかった時、弱かった時、私たちを踏みにじる出来事があったということからです。その踏みにじられた時、私たちを踏みにじた人は強い人でした。だから反撃できませんでした。我慢してきました。そしてこの叫びはこうじゃないでしょうか。「私だって人間だ。馬鹿にするな」それは怒ったらみっともないから私たちは心の奥底に隠して生きてきたんです。神様は不思議な方だになって思います。この怒りは正当な怒りです。「私はそんなふうに扱われるべきじゃない」「私は大事に尊重されるべきだ」それが私たちの叫びです。神様は私たちをそういうふうに創ってくださったんです。不当に扱われたら怒りなさい。だから

私たちはこの共に暮らす中でカウンセリングを必要とする時期がありました。それぞれがカウンセラーについて、自分たちの問題を明るみに出してきました。この話をある講演会場でして質問がありました。若いお父さんでした。「島先生が話されたように自分も無意識のうちに子どもに八つ当たりしてしまう。どうしたらそれを解決することができますか？」って質問しました。Kさんも後ろで聞いていました。Kさんはお祈りが大好きですから、私の正面にいてこうやって不自由な手でお祈りする格好をして「お祈りすればいいんだよ」ってやっていました。「Kさん待ってね」って言って、「そのつらかった、悔しかった、悲しかった出来事を安全な場所で安全な人に何度でも聞いてもらってください」ってお話をしました。これが私たちの問題です。そしてあまり長くは申し上げられませんが、障がいを持った人たちと一緒に暮らすなかで私は障がい者の問題じゃなくて、人間全てに共通する問題を考えさせられてきました。障がい者と暮らすだけでなく、それぞれの家庭で、親子で、夫婦であるいは友人同士で、会社で、共同体で必ずやりにくい関係が生じます。実はラルシュ・ホームはそういう関係をどうやって生きていったらいいのかという知恵を私たちに教えてくれました。最初ラルシュ・ホームは24時間365日障がいを持った人たちと暮らしていたようですが、アシスタントが疲れ果ててしまって、もう怒りでいっぱいになるので、まず休むことを始めました。一日の間に自分の時間を何時間か持つ。一週間の間に2日間は休む。可能だったら一年に一ヶ月は休む。そして人間関係があまりにこんがらかってややこしい時には家を別々にして住む。あるいは組み合わせがあまりにもうまくいかなかった時には組み合わせを変えてみる。つまりあまりに人間関係が切羽詰ってやっていけない時には休むこと、距離を置くことってことを提案しています。これだけでずいぶん違います。

ラルシュ・ホームではいろいろな会議があるんですけど、日本のラルシュ・ホームは静岡の「かなの家」ってところなんです。ある時かなの家が国際会議に行って、「今、かなの家はなんの問題もありません」という報告をしたようです。するとどうなったのでしょうか。大問題になりました。「問題がないなんていう共同体はありえない。それは何かを見過ごしにしている、真剣に考えていないんだ」ってことだっていうんです。ジャン・バニエはラルシュ・ホームの創設者ですし、リーダーシップに優れていますし、人間理解の深い人ですから、リトリートの中でいろいろな質問がありました。ある質問はこうです。「バニエさんの共同体にはなんの問題もないでしょ」どうだったのでしょうか。バニエさんは「とんでもない。問題はありますよ。でもそれがいいんです。問題がない方が問題です。問題がないのは誰かが我慢してるってことです。問題があるっていうのは誰かがやりづらい、生きにくい、なんとかしてくれって言うてることですから、大事なのはその問題をちゃんと受け止めて話し合っていくことです」と言いました。みどりの家でも一月に一度話を聞きにきてくれる人がいるんですが、私も人間関係が困った時に彼女に相談します。すると彼女は言うんです。「話し合うことね」顔も見たくない、話もしたくない。それなのに「話し合うことね」って言うんです。でもその話し合うっ

ていうことはみどりの家のミーティングのように自分の気持ちを正直に話して、聞いてもらうってことです。これはとても不思議な力があります。自分の気持ちを正直に話す。でもそれは危険なことでもあります。弱さをさらけ出すことです。でも自分が一番言いたい本当のことを言えた時、私たちは本当に楽になります。だから皆さんもそういう場所をぜひ確保して欲しいなと思うんです。

Kさんが私たちの家に来るお客さんを迎える時、私たちでは決してできない働きをしてくれました。Kさんはうるさい、Kさんは要求が強い、いろんな問題があります。でもKさんに素晴らしい賜物があります。私の友人の何人かは胸の奥に悲しみを秘めてやってきます。ある時、最愛の息子さんを亡くされた友達がやってきました。彼女は明るく振舞っていて、他の誰もがそんな悲しい思いをしているとは気が付きませんでした。ところがKさんはその友だちを自分のそばに呼んで、近くの椅子に座るように言って、黙って彼女の肩に手を置いて覗き込みました。私もKさんにこの人が子どもさんを亡くしたばかりだとは言っていない。でもKさんは口には出さないけれどもこの人はそういう痛みを抱えているんだってことを初めて会ってわかって、そして彼女が一番に必要としている励まし慰めを与えてくれたんです。障がいを持った人たちは私たちではできないことをしてくれます。助けてくれます。でも一方では私たちが忘れていた、見なくなかったそういう怒りも引き出してくれます。だから一緒に暮らすってことは正直にならざるをえません。喜怒哀楽が激しくなります。大人ぶって平気だって顔ができません。でも私はとても楽になりました。そういうところからこの世界を見たとき、ジャン・バニエさんが言ったとおり、いかに私たちの社会は歴史的にも弱肉強食かということのを思います。だからバニエさんが「この人たちに耳を傾けたら世界は平和になる」って言ったのは、この世界の暴力の源を、その原因を彼らが教えてくれてるっていうことじゃないでしょうか。

私のボランティア活動の一つにホームレスの支援があります。25年ほどいこいの家ってところを支援してきました。ホームレスの方たちが昼間来てお茶を飲んだり、軽いお昼をとったりする場所です。ホームレスの方で業の高速の下に小屋を建てている方とか、ビニールハウスの方たちがいらっしゃいますが、あの方たちはホームレスの中でも力の強い人たちです。力の弱いホームレスの人はダンボール一枚、新聞紙何枚か持って歩いて、ビルの下で寝ています。そういう人たちがいこいの家に来て時間を過ごしていきます。社会から軽んじられ、ホームレス仲間からも軽んじられている人たちです。だから馬鹿にされることは本当によくわかっている人たちです。そういう人たちですからいこいの家では上下関係や力の関係がなく、みんなが仲良く暮らせるのかなってずっと思っていたんですが、なかなかうまくいきませんでした。新しく来たおじさんが、みなさんの様子を見て、「ここ弱そうなばっかだな、ここでちょっと力を振るっても大丈夫だなー」なんて思って威張り始めたんです。なかなかその問題は解決しませんでした。そのことを考えた時に、私もホームレスのおじさんたちも上下関係しか生きた経験がないので、誰も馬鹿にしないで並んで生きるという生き方を経験したことがないっ

てことに気が付きました。このために私たちの社会がどんなに生き難いことになっているかってことです。最初に「ご自分が好きですか？今の生活が好きですか？」という質問をさせていただきました。ぜひ自分を好きになっていただきたいし、今の生活を大事にさせていただきたいと思うんですが、まず私たちを受け入れてくれた人がいて、大事にしてくれた人がいるっていう時、私たちは自分を大事にすることが、好きになることができるのではないかなというふうに思うんです。でも弱さをさらけ出しても私たちが大事にしてくれるかなという心配があります。残念ながら私たちの社会は、持っているもの、環境、仕事あるいは家、そういうもので私たちの価値を決める社会になっています。でもそういう価値観を私たちが受け入れる必要は全然ないんです。もう何年も前ですが、仮名ですが三浦さんというおじさんがいこいの家にやってきました。髪の毛がボサボサで着ているのもボロボロでした。スタッフが散髪して、着替えをしてもらって、シャワーして落ち着いた時、三浦さんがこういう話をしました。「これからは赤信号で止まる」って言いました。皆さんほんとにまれですが、うっかりして赤信号で行っちゃうことありますよね。車だと。でも歩いている時は死にたくないから行かないと思います。今でもいこいの家の近くの信号には歩行者多数通行注意という看板があります。ホームレスのおじさんたちが赤信号でも渡っていくので運転手の方で気をつけろという看板なんです。もうそういえば20年以上看板が立っています。三浦さんが言いました。「これからは赤信号で止まる」。変なこと言うなと思いました。こういうことなんです。彼は九州の炭鉱で働いていて、名古屋で仕事をして病気になって働けなくなりました。そして働けなくなった時にわかったことがある。自分が宿に行っても店に行ってもお金があった時はみんな「いらっしゃい」って言うてくれた。あのいらっしゃいは自分に対してじゃなくって自分の持っていたお金に対して言うていたんだ。だから働けなくなって金がない自分を誰もいらっしゃいとは言ってくれない。でもあんたたち、いこいの家の人は「いらっしゃい」って言うてくれて、「また来てください」って言うてくれた。だから自分は赤信号では止まるって言ったんです。私は改めて私たちの社会が本当に人を見かけや持っているものやそういうもので判断する悲しい社会だなと思いました。たぶんみなさんは違うと思いますが、もう20年以上前のことです。あるおじさんが「街の若い奴らが俺たちを化け物のような目で見るけれども、化け物じゃねえぞ、同じ血が流れてるんだ」と言いました。本当につらい言葉です。障がい者問題をお話しようというふうに思って歩んできた私ですが、実は私たち全ての人間に通じる問題が未解決である限り、障がい者もまた大事にされないなっていうふうに思います。

私はクリスチャンとしてイエスが十字架に架かって死んだという話を思い起こす時に、イエスも同じように蔑まれ馬鹿にされた人だったと思います。十字架に架かる直前まで兵士たちがイエスを鞭打ち馬鹿にしました。宗教家も馬鹿にしました。十字架に架かっている死刑囚までイエスを馬鹿にしました。イエスは兵士に対して、宗教家に対して、並んでいる死刑囚に対してなんにも悪いこと

をしていません。でも彼らはイエスを馬鹿にし、嘲ったんです。私の想像ですが、イエスは「神様は愛だ」って言います。そして宗教家はイエスを罵る時に、「人を救ったけれども自分を救えないじゃないか」って馬鹿にしています。宗教家こそ自分を救ってそして人々に救いを説かなきゃいけないのに、自分も救えない救い主とイエスを馬鹿にしました。それは宗教家の叫びだったと思います。人を教えているけれども自分の心の中にはなんの喜びも、神様が愛だなんて実感もない。その怒り。そして兵士たちは馬鹿にされ、下積みの生活をしてイエスを鞭打っています。死刑囚が心の中に思ったのはこういうことかなと思うんです。自分の人生にはなんの良いこともなかった。誰も助けてくれなかった。それなのに隣にいるイエスは「神様は愛」だなんて言う。そうだったら自分は どうしてこんなところまで追いやられないといけなかったんだ。そこにいた人がみんな自分の人生を怒り、神様に怒りを向けていました。そしてそれを弱い姿になったイエスに向けて八つ当たりしてるんです。イエスはそれを見て、ルカによる福音書だと、「神様彼らは何をしているかわからないのです。彼らを赦してください」って言っています。とても冷静です。暴力の正体、八つ当たりの正体、なぜ人々が自分をこのように扱うのかということイエスは見抜いていたんです。私たちはそんなことができませぬ。暴力が怖いからただ逃げるだけ、なんとか回避したい。でもその暴力を突き動かしている基に何かあるのかってことをイエスのように知っているってことは大事だと思います。そしてその暴力を私たちの世代でストップする。次の世代には渡さない。その時世界が変わるんじゃないかなって思います。私は、赤ちゃんと障がいを持った人とイエスさまは同じように人々の怒りを買ってやすい人たちだなんて思います。赤ちゃんは本当に可愛いです。でもその赤ちゃんが一晚中泣き続けたらどうでしょうか。もうどうしていいかわからなくなります。障がいを持った人も弱い存在で、私たちを助けてくれることもあります。どうやっても言うことを聞いてくれなかつたりします。そうすると私たちの心の中に暴力が、憤りが湧きあがってきます。そういうものを私たちが抱えているということ。そのことに自覚的に生きるということが、人間関係とか、私たちの社会を変えていくのではないかなと思います。そして価値観の違う人を受け入れるってこと、これは本当に大事なテーマだと思います。私は和尚さんたちや、自分はプロテスタントですがカトリックの人たちと一緒にボランティア活動しながら本当に学ばされます。宗教の違いは問題じゃありません。イスラム教徒もキリスト教徒もユダヤ教徒も、みんなお互いの違いを認めあいながらどうやったら一緒に暮らしていけるか、それが世界の課題であり私たちの課題だと思います。

どうかみなさんも難しい人間関係を生きなきゃいけない時には、信頼できる人に助けをいただきながら、そして自分を大好きになって歩んでいただきたいといます。

2013年12月3日(火) 名古屋学院大学宗教講演会

人間関係を生きる知恵

島 しづ子

チャペルブックレット No.18

2014年5月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部
〒456-8612
名古屋市熱田区熱田西町1番25号
TEL 052-678-4096

印刷 佐川印刷株式会社